

コレ一 随筆



“波の上” 我がふるさと

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
下地 武義

先日、NHKで奥武島の海人の紹介をする番組で冒頭にお兄ちゃんの証明として橋より海に飛び込むシーンが紹介されていた。集落のお兄ちゃん達が次々と飛び込んでいく、中学生になりたてくらいの子が足より飛び降り自慢そうな顔を見せる。これと全く同様のシーンが、かつて我が波の上にもあった。昭和20年代から30年代初頭に話は飛ぶ。セメント船が波の上神社の崖下から50mくらいの沖合に沈没したままで、マストが海に突き出した状態であった。当時の海はとてもきれいで澄んでおり、小魚もそこから中で泳ぎ回っていた。3月になるともう海のシーズンである。4月の新学期が始まる頃は、日焼けで皮剥ける状態であった。父親に泳げなくては男でないと言われて、泳ぎの練習を首里のプールにまで遠征して練習するのだがなかなか上達しない。波の上のプールによく投げ込まれたものだ。小学校卒業までも50mが泳げない、友達は皆あの沈没船まで泳いで行き、お兄ちゃん達が架けてくれるロープでターザンの如く、格好良く海に飛び込んでいくのである。早くあそこまで泳いで行きたいと羨望は増すばかりである。息継ぎを教わって、特訓して何とか50mを泳ぐことが出来るようになったある日、勇気を出して沈没船を目指した、途中で海の色が濃いブルーに変わる、足が震えだし戻ってしまう。悔しい。何度も繰り返した後、何とか沈没船に辿り着けた。これからが大変であった、縄梯子を上らないといけないのである。足をかけると梯子が90度に曲がって、全体重を手足で支えないと背中から海へドボンである。必死になって上りきった。船上で寝転がって、やっと一人悦にいったものである。一息ついた後、いよいよターザンになるのだ。ロープに

つかまり何度か往復して揺れて海に飛び込んだのだ。勿論足から、海中に深く入って、今度はそこから這い上がらねばならない。息が切れそうだ。一生懸命に両手でかいでかいで水面に腰まで飛び出したときは、何とも言えない安心感と満足感を味わったものだ。もうお兄ちゃんであると満足そうな顔であったことであろう。当時、波の上は大勢の中学生、高校生が泳いでいた。海で色々な遊びを教えてくれた。どうしても出来なかったことがある。ある高校生が、30cmくらいの棒切れでアバサーをつつくのである。アバサーはたまたまに膨れ上がってしまう。これを何匹も何十匹も集めてくるのである。この遊びだけは高校を出た後も、現在も出来ないままである。時代は変わって、平成の初期、神社のちょっと沖合の大橋から息子らが飛び降りて遊んでいた。そのことが原因で、父兄から文句が出たようで、学校から呼び出しをくらった。飛び込みを止めさせなさいとのことであった。彼らもおそらく飛び込むことが、お兄ちゃんの証明のつもりであっただろう。そんな息子を自慢に思ったものである。その頃から、波の上は、人工ビーチ以外は遊泳禁止（市議会で決まったとか）となっている。空港からのトンネル工事の影響であろう、海も濁っている。遊んでいる人も減った。堤防の外にはテトラポットが積まれ、泳ぎにくくなっている。この工事の始まる前は、数メートルの深さに、ほんとにきれいなサンゴが繁殖していた。30cmほどの魚も遊泳していた。今は、こんな光景は見られない、残念である。人工ビーチの網内にアバサーだけはたくさん泳いでいて、私の泳ぎの下手さ加減をあざ笑っているようである。

自然をいじくり過ぎて、少年の冒険心を試す場所を大人は奪っているのではないだろうか。貧しい時期の最高の遊び場所であった波の上は、はるかかなたの海を眺めながら、夢を思う場所でもあったし、落ち込んだとき慰めてくれた場所でもあった。偉大な自然の回復力で、いつの日か往時の美しい波の上に戻ってくれることを願って止まない初老の思い出でした。